

橋 詰 良 一 著

「家なき幼稚園との主張
と実際」

より

(一)



自 序

私は、百の空論よりも、むしろ一つの実行を貴びます。

天下は実行よりも、空論を貴いものと考え、空論を学者のする事だと思っています。空論は往々に理想と混同されます。理想は実行の可能と不可能とを問わないのです。可能と不能とによらない理想を語るものを往々にして真理を語るものだと考えます。

真理を語るものは学者でありましょう。学者は必ずしも実行を考えません。けれども学者でもない私たちは、ただちに実行を成就することが人間としての最も大切なことだと考えております。

私の「家なき幼稚園」もこの簡単な実行から出発して、今もその実行を続けているにすぎないものです。決して語るための仕事でもなければ、見てもらうための仕事でもないであります。しか

しながら遠い所から、意外にも多くの同感者からその概況を知りたいという親切な言葉をよせられることの多いのに励まされて、いくらか話し合ってみたいと思うことを、この書物にしたのであります。

かねてからこの『家なき幼稚園』に特別の注意をはらってくれている永田与三郎君が、また切にその出版を望まれるままに、うかと約束したことがツイ一年半の遅延となつていまさらどうにもこうにも断りようのない羽目になったことも、この著述をあえてするに至った大きな原因です。

昭和三年初夏

著者 識

第一 計画の動機

私がこの「家なき幼稚園」を計画した最初の動機は、ほんとに

簡単なものです。

それは、大正十年の夏でした。外遊途上からの病氣をもつて帰ってから、およそ三ヶ月ばかり家に引きこもっている間に、毎日九人の子どもと大人とが小さな家庭の中で、それぞれの生活を営んでいる間に、どうしても、大人の要求希望と子どもの要求希望とが一致するものではない、むしろ非常に大きな隔たりをもっているものであることを明白に知得すると同時に、大人と子どもとを雑居させておくことは双方の間に損失のみあって、利益のないことを感じました。

特に、小学校へ入学する以前の幼児たちにとっては、一層恐るべき損失を大人から強要されていることを痛感しましたので、簡明に「子どもは子ども同志の世界に住まわせるが何よりの幸福だ」と思いついたのがその最初です。

子どもは子ども同志の世界人

盲人は盲人同志の世界が最も理解と同情に満ちた世界です。花嫁は花嫁同志、娘は娘同志、ばあさんはばあさん同志が、いつの世界になっても、一番理解のある、同情のある世界であることも明らかです。

それと同じように、幼児も幼児同志の世界に行かなければ、互いに真の理解ある生活、真の同情ある生活、真の要求を共にする

生活を営む事はできません。

でも、大人には自分の膝下におかなければ子どもは幸福でないという親切すぎた考えが、伝統的に維持されています。自分の手でなければ子どもの幸福は作ってやれない、大人の援助がなければ子どもの幸福を完了することはできない、大人の助力がなければ子どもの要求をみたすことはできないと、心からの熱愛をもって考えられているけれども、子どもは無用の援護や無用の助力を要求しないばかりでなく、かえって、そのお節介をうるさがり、さらに、憎む傾向があります。その上にややもすればその大人の愛着を利用して、自分のわがままを遂行しようとする場合さえ生まれてきます。

教育家の常にいうような、人と人との相互生活の基調を整えるためにも、幼児自身の内省をさせるためにも、幼児は幼児同志の世界におかなければならぬことは十分にわかりますが、幼児自身の営みを幸福にし、愉快にするためにも幼児は幼児同志の世界においてやるのが何よりの捷徑しやくけいです。

ほんとに、子どもを喜ばせる道、子どもをよくする道は、子ども同志の世界においてやることです。そうして子ども自身に、自覚、自省、自衛、互助、互棄する世界を創ってやらなければ真の子どもは幸福は望まれません。

この子どもを子ども同志の世界におくということが、実に私の

幼稚園の第一希望にほかならないのであります。

大自然の世界へ

子ども同志の世界をつくるのに最もよい所は、大自然の世界です。広い広い野の中、森の下、山の上、川のほとり、そのどこへでも子どもを集めて、子どもの愉快なように遊ばせたり歌わせたり、走らせたりしてやりさえすれば、何の手間もなしに自然の子どもの世界ができます。そして、この方法はいかなる国にも、いかなる民族にも、すぐに実行のできることで、最も完全な、無難な良案です。

プラトンは「幼児の身体を強健にすることが教養の要義であつて、六歳までは男女とも大氣中に自由な遊びをさせなければならぬ」と申しましたが、自然の中で子どもを遊ばせることは昔からの聖者や学者たちは皆いつたことで、別に珍しいことでも不思議なことでもありません。

かのベスタロッチが、貧しき人の子どもらと共に遊んだのもチューリッヒの森です。フレーベルが幼児たちと遊んだのもカイルハウの林です。そして「人は幼児時代において自然と親しむようにすべきものである……それは、自然を通じて自然を支配する所の神の靈に通せんがためである」と申しております。

いまさら野の教育の史的考察なんかする必要はありませんが、

とにかく、建物に拘泥して人工的の汚れにあこがれやすい人々の心を清くあらたむるためにも、自然に没入することが、どれくらい簡便で意義深いものであるかを三思したいものです。

幼児教育の理解のために

私は「教育」などという立場からこの子どもの世界を主張するものでもなく、また「社会施設」などという点から立案したのもではありません。単に人間道としての思いつきにほかならないのであります。そして、教育的の言葉で説明をしますと「幼児教育の理解を社会的に広める」という上からもこの簡単な子どもの国の営みが非常に必要な役目をつとめるものだといえるのです。

世間では今日でもなお幼稚園の幼児教育を一種のぜいたく教育であると考えたりまた傍系的の教育で、しなくともよいものだと考えたりする伝統をもっています。が、前にいったような「子ども同志の世界」という考えに徹して、子どもの生活に必要な意義のあることを手みじかく理解させるに最適切な道であつて、家庭人が総がかりで人類のために努力しなければならぬ道だというに帰着するのです。かの「一切の計画は、善にして、行ないやすからねばならぬ」といったルソーの言葉は、いつでも私を力づけてくれます。

幼児教育の究境地

私が望む子どもの世界は何物にも代え難いほどの熱愛をもった母親と、何物とも比肩することのできない純情をもっている世の娘たちとの協力によってなされることを望むもので、その協力といえはむずかしいがーのために集まる人口の自然のやわらぎが、やがて究境地を意味するものになると信じています。

すなわち、幼児の教育は、人間としての成育を心のうちからも、身の外からも健全に基礎づけるというにはこの上もない便法だと考えます。

なぜ、幼児の教育を行なわなければならぬか、という問題の説明は、まだまだ今日の社会には理解されていない、それを理解させる幼稚園の態度もまたはなはだ難渋なもののように見えます。しかし、私はこの方法によって自然の子どもの国へ母を集め、姉たちを集めて、不言不語のうちに、その必要を会得させることができましたら、ほんとに大きな効果を社会的にもたらすものだと思っています。

第二 私の目指すところ

私の「家なき幼稚園」について、目指すところは、

- (一) 誰にでもできる安全な子どもの国
- (二) 若き女性と、幼児との自然接触

(三) 自然の児童愛道場

(四) 母と姉のつくる子どもの国

以上の四大項目を目標としています。これはほんとに私の祈願の主要点でありますから静かに聞きとっていただきたいと存じます。

誰にでもできる安全な案は

「子ども同志の世界」それはほんとうに必要な社会的の営みで、誰でもが、どこにでも、つくることのできる安全なものでなければならぬということは私のまず希望するところでもあります。

ある特別な知識をもった者や、特別な人によってのみ作らるるような子どもの国（一般教育界の幼稚園のような）はもとより私のいおうとするところではありません。で、誰が手を下しても完全に、そうして簡明に作ることのできる案といえば、娘と母とが子どもを集めて、自然の中に建設する子どもの国の案よりよいものはないと私は信じているのであります。

誰にでもできる案、ということはやがて私が常にいおうとする素人主義の案であるとも、いうことができます。素人とは何の道でも、職業とせざる人の従事する道に用いらる言葉で、素人にはその道を職業とすることのかわりに、その道を悦楽しやすい長所があります。素人はその道の上における何らの因習をももって

おりません。またその道における何らの伝統にもとらわれる不由がありません。その上に、地位や階級に拘泥したやせ我慢の必要を認めません。したがって知らざるを知らずとし、他に問うことを恥としないだけの謙虚さがあります。これが素人としての自由な尊い長所で、それによってつくられる案は大抵悩みなく遂行することができるとあります。

素人を主体とし、大自然をその地とし、子どもの生活を自然に営ましめようとする案は、そこに何らの支障もなく、不自然もなく、安全に子どもが作られるもので私があえてこれを世にすすめようとするゆえんであります。

若き女性と幼児との自然接触

若き女性、それは「むすめ」という時代の若き女性と、幼児とを自然に相ふれさせておけば、何らの技巧なしに、また何らの計画なしに自然の愛が発露して、おのずからなる保育の妙論が会得されるものだということが私の信条であります。

で、子どもの国を自然に建設する最初の第一要件として、私は女学校を卒業した程度の若きむすめさんを保母として採用することに決めました。

すなわち、幼稚園としての私の子どもの国を建設する趣意や、その趣意の実行を、軽快ならしむるためには、女学校教育の素地

をもった娘さんが最適当な人であると考えます。けれども後節にいうような広汎な「子どもの国」の建設には単にやさしい娘さんであれば十分であります。

私が若いむすめさんが必要とする理由は、

- 1 むすめの純情が幼児の神性と相触れるとき、神壇においてのみ見ることのできるような気高き心華のひらめきが双者の間から発生しますから
- 2 その心火の各自に反映するときに自らの心性浄化が望まれるから
- 3 若き女性でなければ大自然の中を子どもと共にかけ回る愉悦をもち得ないから
- 4 男子の子ども好きも保母とするに適する場合はあるが、幼児に直接する愛護者としての本性はどうしても女性に限るから

以上によって私は若き保母を得ることに幾多の苦勞を重ねてまいりました。

相互愛の可能性

果たして、若き女性と幼児とをふれさせておきさえすれば、そこに自然の愛が生まれて、おのずからの幼児教育に合致するような道の開発ができるものであろうか、とは恐らくは何びとも不安

に考えるところであろうが、事実においてはまさしくその希望を裏ざることなしに、種々な方面において、貴い成果を認むることができています。

ほんとに、大胆なような私の実験から、わずかながらもよき結果を認むることのできたのは、私にとつてどれだけ心強いこともわかりません。その一例として、毎日集まって来るその娘たちの日記に表われた心火の輝きを後節に記録してご参考に供します。これにはむしろ、何らの因習的教育をほどこされていないための自由さ、自然さから生じた結実の多分に含まれていることを申し添えておきます。

プラトンは「教師と生徒とは互いに恋人の如くなって、愛のために無償の仕事をするのが教育でなければならない」というようなことをいっていますが、私の娘たちと幼児たちとの間には、まさにこの聖愛の発現していることを認めるのであります。

閑却された接触

教育者の養成には、昔からこの「接触」が不思議にも閑却されています。師範学校に行っても三年余の間は心理学や、哲学や、教うる方法やらの講義にのみ没頭させられて、四年の終りごろにやつと半年位、附属小学校の児童に接触させられるのが常だと聞いています。こんなことで愛の教育がどうして味わわれましょ

う。またある意味からは、あまりに理論や術を教えられてから子どもに接するがゆえに、かえって愛の発現を妨げる場合が少なくないようです。

それよりも、師範学校入学のはじめから、学生と児童とを接触させておいて、相互間の愛を味得させながら、その愛を根基としたる愛の教育道に進ませたら、今日のような、教育の技師や、教育の吏僚ばかりを生み出す心配がなかったではないでしょうか。愛は相互の接触によつてのみ望まれます。娘と幼児との接触、これもほとんど人間の社会が、この両者の愛の経験をもっていないのは当然です。

女性自身への幸福

これが女性自身への幸福であることは前にいうた通りの相互愛の反映が明らかに立証していますけれども、なお別な方面から見て、こんな児童愛の世界にどんなことがどれだけ自分を幸福にしているかを、ここにお知らせいたしましょう。

昭和二年の春、台湾の女学校をまわつて若い娘たちに、この子どもとふれた愉快な経験（それは私の幼稚園の若い娘たちの経験を主として）を話したことがあります。そんな一回の講演にでも深く感激してくれた女学生の感謝文、感想文を手にした時ほど、強い強いうれしい心持ちにそそられたことはありませんでし

た。

同年の冬に、九州の各地女学校をまわって同じような話をしたときもまた同じような感激を受けましたが、若い娘と幼児とをふれさせることがいかに深いあるものを娘たちの心にはりつけるかを見るには相応の値があると信じますから少しばかり紹介しましょう。

★もう一度ご講演をお聞きしたい。私の一家は、私が幼い五歳の時から、小学校の四年生まで、大阪に住まっていたので、なおさらに懐かしい感がヒンヒンと胸に迫って来る。この台湾のはしに住む私共にも、児童の神性、女性の純情ということについて快くご講演をお聞かせ下さった。今まで何度も、いろいろの講演をお聞きしたことはあるけれども、あんなにおもしろく、かつよくよく私の真心の底までもひびいたことはまずないといつてもいい位です。今が今まで私は、神性純情等ということとは、一つも知らなかった。また考えてみたこともなかった。おそらく本当に眠っていました。それがあの先生のご講演をお聞きしてから、全く眠りが覚めました。まあ!! 何とうれしいことだろう。ああ!! 本当にありがたい。とても筆にはつくされません。あの立派なご講演の内容は決して決して忘れまい。そして後日、一家の人となつてからもなお子どもの神性、純情を美しく守っていきたく思います。(二学年 岩藤里子)

★お話を聞いて、子どもはたしかに神性をもっていると、つくづく思いました。けれどそれを見いだすことのできない私は何という不幸者であろう。私は急に胸が苦しくなつてただただ早く弟妹たちに対してすまなかつたということをおわびしたいような気がして仕方がなかった。思わず心の底から恥ずかしさがつみ通つて、頭をたれずにはいられなかった。ああどうしてどうして自分はこれまで弟妹たちを先生のおっしゃつた通り親切にして上げなかつたであろうか。

これまで弟や妹たちがいかにもおもしろく愉快そうに遊んでいる所を、やかましいね、あっちへ行きなさいよといって、邪魔したことさもありました。急に恵まれた純潔な美しい愛らしい林檎のほほをして、たえず笑みを浮かべている弟妹の顔が眼前に浮かんでくるのでした。ああ早くわが家が帰つてやさしい尊い神性をもっている弟妹たちと一緒に遊びたい、そうして先生のおっしゃつたことをよく守つて、純情をもつて愛して上げたい。(郭氏東戀)

ほか九通略

一回の談話にでもこれだけに感じる女性たちと幼児とをふれさせて、自然の愛の高まることを疑う余地がありませんか。

自然の児童愛道場

私は幼稚園というような堅苦しい連想をもつて、子どもの国を眺めたくは思いません。幼稚園という名に慣らされている教育界の伝統にも、また家庭人の伝統にもかなり難渋なものが付きまとうております。そしてそこにいる先生たちと幼児らとのふれ方から見ても、何とやらかたくなな連想を呼びおこすものがあつて、往々に私たちをさびしくさせます。

で、私はなるべく幼稚園といわずに「児童愛の道場」という言葉をもットーとして、慣用しております。

それは人間のことですからなかなか思うように神妙な世界は望み得ないのでありますが、児童愛という言葉、それにいそしむ修道場、こうした考えがいつとはなしに私の娘たちを優しい心持ちに向けていることも争われたいと信じております。

あくまでも道場なのであります。教育の機関といつたようないかめしい気持ちからは離れたいと願っております。

娘と母のつくる子どもの国

この児童愛の道場は誰の道場でもなく、子どもの母と、子どもに教えらるる娘たちとの互いに愛の道へ、愛の道へといそしみあうための道場で、その両者が協力して作り上げる野の道場であります。

たとえ、それが田のほとりの小道であっても、池のみぎわの草の中であつても、神のような幼児に導びかれて、一向に祈念する愛の浄境であります。

今の私たちの子どもの国には、ほんとにかすかながらもこの神妙な心持ちが「母のお当番」という務めから生み出さるるようにも思われます。

(お当番日記参照)

— つづく —

「家なき幼稚園」は、一月号で紹介されたように、幼児教育の「あるべき姿」を求めて大正期に花開いたユニークな実践の一つである。

このたび、私もは、その主張者であり、実践者であつた橋詰良一氏の貴重な著書に触れる機会をもつたので、ご家族の許可を得て、その一部を転載させていただくこととした。

(編集部)